



館長だより

山形県産業科学館

令和6年8月16日(金)

発行 館長 加藤 智一

ミミズ

「日本自然保護協会 HP/自然の守り手を増やす/記事一覧/[配布資料]今日から始める自然観察「ミミズ種類も暮らしぶりもさまざま」参照

お盆も過ぎると、急になんだか秋っぽくなってくるといふか、虫の声や風の匂い、日差しまでもが変わって見えます。山形では、夏休みも終わりに近づき、子供たちも宿題や課題テストの準備であわだかましくなっています。そうなるといよいよ熱中症の心配も薄らいで、近所の小川や池にゆる〜く釣りにでも行ってみよう。なんて気にもなりますね。身近な小川や池といった釣り場では、クチボソやモロコ、小ブナに小鯉など、あなたとの出会いを待っているものどもが、うじゃうじゃいますよ。釣具屋さんに行けば、竿やら仕掛けやら2千円もあればひと揃え調達できるのではないのでしょうか。餌だって、チューブ入りのものから、サシ、ミミズ、ブドウ虫といった生き餌まで、何だって揃います。しかしここはひとつ自宅の庭でミミズ探して餌にしてみるといふの如何でしょうか。

ところで、近年は家庭菜園や花の栽培を趣味とする方も大勢いて、土造りは重要なテーマとなっています。そういった方々にとって、ミミズといえば、それは自慢のタネに他なりません。「うちの庭にはミミズがとてたたくさんいるんですよ。」といったら、それは自分の庭がいかに素晴らしいかを大いに自慢しているということ。というのも、植物を育てるうえで不可欠な土をつくり、土を肥やし、土を健康にしているのがほかでもないミミズだからです。

さてここからが本題。ミミズの生体。その不思議についてです。ミミズは雌雄同体で、同時にオスとメスの機能を持っています。写真にあるように、環帯（首輪）の後ろの腹面に、左右一対の雄性孔を持

っています。環帯は、ミミズが成熟した証。成熟したミミズ同士が出会うと交尾して、互いに自分の精子を受け渡しします。交尾が終わった後、乾いたら卵の殻になる粘液が環帯から分泌され、これを脱ぎながら、自分の卵子と交尾相手の精子を粘液の中に入れ、口から脱ぎきったら卵のできあがり！（ただし、近所の公園などで見つかるミミズの多くは、雄性孔が退化しており、交尾せずに産卵します。）ミミズは土の中ではかなり大きな動物です。ミミズが暮らしただけで、土壌中の環境を大きく変化させます。ミミズが掘った孔は、空気や水、そしてもっと小さな動物の通り道。ミミズの体内や糞塊（土壌団粒）では、微生物が活発に働いて、有機物を分解します。また、ミミズは、暮らししている場所と食べ物で3タイプに分けられます。表層性種は、落葉中で暮らししており、少し分解の進んだ落ち葉を食べます。地中性種は、土壌中で暮らししていて、有機物に富んだ土壌を食べます。表層採食地中性種は、土壌中で暮らししているものの、地表に体を乗り出して落ち葉を引きずり込んで食べます。この暮らしぶりに対応して、寿命も違います。表層性種は卵で越冬し、春にふ化して、夏までに成熟し、交尾・産卵後の初冬には死滅します。地中では越冬できますので、ふ化・死亡の時期は決まっておらず、成熟するのに1年以上かかる種類もいます。

ミミズは、魚の他、カエルやイモリ、サンショウウオなどの両生類、トカゲなどの爬虫類、昆虫や蜘蛛形類、ムカデ、甲殻類などの節足動物、鳥類、小型の哺乳類など多くの肉食動物の餌となります。一方で、ミミズは、土の中に含まれる微生物や有機物が主食です。バクテリアが分解した様々な物質も彼らの食料になります。ミミズは、キッチンで出る野菜くずや果物の皮、茶殻、コーヒーの粕、乾燥した食品、しおれた植物など、さまざまなものを食べます。新聞紙や段ボールなどの紙類も消化することができます。腐敗したものは特に好んで食べる傾向にあり、生ゴミでさえも、腐っていればいるほど魅力的な食事となります。こんなにまでも私達の生活に

有益な生き物に、私達はどれだけ感謝しているのでしょうか。「ミミズ神社」なんてのが有ってもいいくらいだ。

